

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-06

法定利率ニ関する大蔵省及各地商業会議所意見

(発行年 / Year)

1910

法定利率関了

士花者及各地

高舉令議的意見

別紙ノ問題本會調査上必要ニ付テ至急申
意見彙リ度決散及御依頼候也

明治三十年一月 日 法典調査會

各商業會議所宛

前同文

明治三十年 日 法典調査會副總裁 清浦圭吾

一月 日

大藏大臣 伯爵 松方正義 殿

法典調査會

七伊

五分

五分

四薯

五分

五分

上連馬

四分

六分

八環西

五分

五分

九西

六分

六分

十南

五分

五分

法典調齊會

一 商業上ニ於テ法定利率ハ民法第四百
四條ノ規定ニ從ヒ年五分トスルモ差支

ナキカ

二 若シ差支アリトセハ年幾分トスルヲ
相当トスヘキカ

(說明) 法定利率トハ契約上明カニ利率ヲ
定メスニテ單ニ利息ヲ支拂フヘキ旨ヲ
約シタル場合其他遲延利率立替金ノ利
息等契約上利息ノ定ナキモ法律上當然
之ヲ支拂フヘキ場合ニ於ケル利率ヲ謂
フ民法ニ於テハ此利率ヲ年五分トセル

法收調金會

モ外国ニ於テハ本邦商業上ノ利率ハ民
事上ノ利率ヨリ貴キモノトセ
ニ於テモ從來一般ノ法定利率ハ六分十
ルニ拘ハラス商業上ニ於テハ特ニ之ヲ
七分トセリ(明治十年九月十一日布告第
六十六号利息制限法第三條)高法第百
三十四條(参考)為メ左ニ外国ノ例ヲ示
サン

國名

民事利率

商事利率

一 併

五分

六分

二 獨

五分

六分

三 白

五分

六分

六 澳

五分

五分

現行法
新民法

高法第百

法定利率之義ニ付御諮問之趣拜承仕候則協議仕候處本會之意見別記之通ニ御座候此段若申仕候也

桑名商業會議所

會頭

明治三十年二月一日

貝塚卯兵衛

法典調査會御中

一民事上ノ法定利率ハ民法第百四條ニ於テ第五分ト規定セラレタレトモ商業上ノ法定利率ハ第六分ト規定セラレ相當ト見込申候右商業者中ニ於テハ概シテ金融繁忙ナルヲ

法典調査會

常トス故ニ契約上利率ヲ定メスレテ利息ヲ支拂フベキ旨ヲ約シタル場合又ハ遲延利息之替金利息等ニ於テモ民事上普通ノ利率ヨリ幾分カ貴キヲ以テ相當トス若シ低廉ニ過ルトキハ債務者ノ怠慢心ヲ惹起スノ虞ナシトセス故ニ目今ノ景況ニテハ第七分或ハ八分ヲ以テ相當ナルカ如キモ時勢ノ進歩ニ從ヒ一般利息ノ低廉ニ起クハ自然ノ狀態ニ付商業上ノ法定利率ハ前後ノ如ク第六分ト定メラレ相當ト見込候義ニ御座候

田第壹辨

乙第百四拾九辨ヲ以テ御諮問相成候商業上ニ
於テ法定利率ノ義本會議所ノ意見左ニ

柳モ商業上ノ利率タル既往ノ實蹟ニ徴スルモ
素ヨリ其年金融ノ如何ト商業ノ盛衰ニヨリ一
定ノ利率ヲ認ムルハ能ハズト雖モ概シテ最低
七八分ヨリ最高一割五六分ニ至スルモノニシ
テ現時亦七八分ヨリ一割二三分ノモノ多キニ
至レリ且ツ又銀行預リ金ノ如キモ六分ヲ下ル
モノ少シト云フハシ然リ而テ既往十ヶ年間實
際貸借上ノ利率ヲ見ルモ一割以上一割五六分
ヲ以テセリ依テ之レカ最低タル預リ金ノ利率
トナスモ六分ニシテ高木外國ノ例ニ據ルモノ亦
法定利率ハ第六分ヲ以テ制定ニ相當ノモノナ
ラント思考セリ

法典調查會

右意見其申仕候也

鹽橋商業會議所

明治三十三年二月十日

會頭 三浦碧水

法典調查會

御中

第八五號

啓月二十六日付ヲ以テ法定利率ニ就キ御照會
ノ趣領承致候商業上ニ於ケル法定利率ハ年六
分ノ規定相成可然ト存候此故本會議所ノ意見
御回答申上候也

明治三十年二月十三日

熊本商業會議所

法典調査會

御中

乾第三〇七號

客月廿六日付甲第三八號ヲ以テ商業上ニ於ケル法定利率之体御申越之趣了承若ハ民法上規定ノ五分ハ商事上ニ在ワテハ低下ニ失レ候様被存候條若利率ニ一分ヲ増加シ毎年六分相當歩合ニ可有之ト思量致候此段及御回報候也

明治三十年二月十八日

大藏大臣伯爵松方正義

法典調査會副總裁清浦奎吾殿

追テ已往十ヶ年間ニ於ケル東京同盟各銀行間取引ノ利率別紙ノ通取調御參考迄及御送付候也

東京同盟銀行金利高表(割引歩合)

		二十一年	二十二年	二十三年	二十四年
		最高	最低	最高	最低
一月	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
二月	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
三月	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
四月	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
五月	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
六月	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
七月	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
八月	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
九月	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
十月	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
十一月	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
十二月	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇

決裁調分會

		二十五年	二十六年	二十七年	二十八年	二十九年
		最高	最低	最高	最低	最高
一月	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
二月	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
三月	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
四月	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
五月	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
六月	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
七月	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
八月	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
九月	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
十月	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
十一月	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
十二月	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇

右十年間平均高九分三厘九毫

本年一月廿六日 乙第百四拾九號ヲ以テ法定利率三義御諮問ニ付本會ニ於テ審議候處商業上法定利率八年六分ヲ以テ相當ト認了仕候間此段答申仕候也

静岡商業會議所

明治三十年正月會頭 北村五郎兵衛

法典調査會

御中

法典調査會

商業上利率ノ義ニ付答申書

商業上ニ於テ法定利率ハ民法第百四條ノ規定ニ從ヒ五分トスルモ算支ナキカ若シ算支アリトセハ算額分トスルヲ相當トスベキカノ御諮問ニ對シ本會議所ノ意見左ニ及答申候也

栃木商業會議所

明治三年四月十日

會頭 石塚新吾

法典調查會

勸中

一商業上ニアワテハ民法ノ如ク國ヨリ利息ヲ

法典調查會

生スベキ意思ヨリ成立セシモノニ無之信用ヲ重シ遲延或ハ契約ヲ欠カザルヲ旨トシ都テ取引ヲナスヲ通例トセリ依テ商事上ニ於テハ民法規定ノ利率ヨリ貴ク年六分トナス當ヲ得タルモノト思考ス

商業上ニ於ケル法定利率ニ関スル
意見答申書

本年一月二十六日附ヲ以テ御諮詢相成候商業
上ニ於ケル法定利率ニ付本所ノ意見ハ別紙ノ
通ニ御座候間此致及御答申候也

大坂商業會議所會頭

土居通夫

法典調査會總裁伯島柁方正義殿

商工上ニ於ケル法定利率ハ年六分ト為スヲ以テ適当トス

理由

凡ソ商取引ニ供用セラル、資金ハ彼ノ民事上ノ取引ニ於ケルモノニ比スレハ活用頻繁ニシテ之ヨリ生スル利益ノ多分ナル又之ニ伴フ危険ノ度合ノ強キ等大ニ其ノ趣ヲ異ニスルモノナリ既ニ兩者ノ問題ノ大ニ要ナルアルヤ之ニ對スル法定利率モ亦兩者ノ間ニ適度ノ危害ヲ設ケサルヘカラス即チ内外ノ事情ニ鑑ミ既往現在及ヒ將來ノ趨勢ヲ察シ我カ民法規定ノ利率年五分ナルニ對シ商工上ノ法定利率ハ一分ヲ増シテ年六分ト為テ適當トス

法典編纂會

或ハ本邦現吏ノ金融事情ニ照シ又歐洲諸國現行法規ノ利率ニ對比シテ我カ商事上ノ法定利率ヲ年六分ト為スヲ以テ俗庸ニ失スルモノナリトスルモノアリ今單ニ本邦今日ノ事實ノミニ基キテ之論セハ更ニ増シテ年七分又ハ八分ト為ス方適當ナルカ力如キ觀十クニアラスト雖モ少シク考査思慮スルニ於テハ其ノ次ニテ然ラサルモノナルヲ知了スルキナリ何ントナレハ凡ソ法典ニ規定スル利率ノ如キハ僅々數年間ノ事實殊ニ經濟事情ノ激變時期トモ謂フヘキ本邦今日ノ市場利

率ニノニ則ルハキモノニアラスシテ廣ク内
外ノ事情ヲ参酌シ遠ク将来ノ趨勢ヲ考量シ
而シテ後高貴ニ失セシヨリハ章曰伯廉ナレ
程度ニ於テ之ヲ定ムルヲ要スレハナリ今試
ニ海外經濟史實ノ示ス所ニ拠レハ市場利率
ハ文化普及シ經濟事情飛達スルニ從ヒテ自
ラ漸々伯廉ニ赴クモノニシテ本邦ノ如キモ
乃チ此ノ世界ヲ大勢ニ支配セラレ、ノ免シ
スシテ終ニ同一史実ヲ襲フニ至ルキヤ必
セリ是レ我カ法定利率ノ高貴ナラシヨリハ
寧ロ伯廉ナルヲ可トスル所以ナリ

又彼ノ歐洲諸國現行法定利率ノ其ノ實際ノ
市場利率ニ比シテ稍々高貴ニ失スルノ觀ア

法典調査會

ルハ是レ全ク此等諸國ノ法典ハ早ク改ニ經
濟事情ノ今日ト大ニ異ナリシ往時ニ於テ成
文トナリ以テ其ノ根、今日ニ及ヘルモノナレ
カ故ノミ現ニ近頃改正編成セル獨逸新民法
ニハ其ノ利率ヲ四分(現行法五分)トシ商事
業ニハ之ヲ五分(現行法之六)ト為セ九カ如キ
例ヨリスルモノ大勢ノ趨向以テ容易ニ推知ス
ヘキナリ

以上陳述セシ理由ニ依リ本邦ハ民事上ノ法
定利率五分十九ニ對シ商事上ノ法定利率
ハ之ヲ年五分ト為スヲ以テ當ヲ得タルモノ
ナリト決定セリ

去月二十六日付乙第百四十九號を以て御依頼
に相成る高業上に於ける法定利率の問題に
對する本會議所の意見は別紙の通りに有之
るに有以段及御回答也

名古屋高業會議所

明治三十年一月廿三日

會頭

奥田正香

法典調査會

御中

法典調査會

商業上ノ法定利率ハ民事上ノ法定利率ニ比シ
其割合ヲ高クスルハ必要ト思考スルヲ以テ其
利率ハ民法第四百四條ノ規定ニ從ハズ舊法
第三百三十四條ニ據リ(年百分ノ七)ト規定スル
ヲ相當ナリトス

理由

蓋シ商業上ノ貸借ニ於テ契約上明ニ利率ヲ
定メズニテ單ニ利率ヲ拂フベキ旨ヲ約スル
カ如キ場合ハ實際ニ於テ常ニ之ヲ見サルモ
ノニシテ偶々斯ル場合マリトスレハ必スヤ
一時暫且ノ契約タルニ過ギス何ントナレハ
商業上ノ資本ハ利益アル運用ニ於テ瞬時モ

法典調查會

休止セザルモノナレバ斯ル漠然タル契約ニ
於テ貸借ヲナサバ九ナリ故ニ債務者ヲ以テ
極メテ速カニ之ヲ辨償セシムルト共ニ債權
者ヲ以テ他ノ商業資本トシテ運用シタル同
一ノ利益ヲ得セシメサルベカラザルハ當然
ナルニ依リ自ラ民事上ノ貸借ト其性質ヲ異
ニスルヲ以テ其利率ヲ高クセザルベカラズ
殊ニ遲延利息若クハ立替金ノ利息等ニ至テ
ハ其利率ヲ低クスルトキハ債務者タルモノ
其辨償ヲ緩慢ニ付シ終ニ資本運轉ノ敏捷ヲ
害スルノ弊ヲ生スルハ免レザル所ナラシ故
ニ從來ノ慣習ニ徴スルモ斯ル場合ニ於テハ
殆レド罰金ノ性質ニ類スル利息ヲ契約スル

モノアリ近頃株式組織ノ會社ニ於テ株金拂込ノ延滞利息ヲ定ムルヤ總テ市上一般ノ金利ニ比シ著シク其利率ヲ高クシテ制裁ヲ嚴ニスルガ如キモ現ニ其一例トシテ見ルベキナリ

本邦ノ金利ニ比シ其金利頗ル低位ニアル獨佛其他ノ諸外國ニシテ尚ホ且ツ高業上ノ法定利率ヲ規定スルヤ既ニ年五分乃至年二分ナリ然ラバ現在本邦ノ一般金利ト其等諸外國ノ一般金利ト對照シテ以テ兩々相對ニ權衡上同一位ニアルベキ本邦ノ高業上ニ於ケル法定利率ヲ定メント欲セハ年百分ノ七トスルモ未ダ低位ニ過カルノ感アルベシト雖

法政調查會

モ本邦經濟社會將來ノ趨勢ヲ案スルトキハ今日ニ於テ適應ノ法定利率ハ舊高法第三而三十四條ニ據リ之ヲ定メ民法第四四條ニ從ハサルハ相當ナルベシト信スルナリ

本年乙第百四十九號の以テ當所ノ意見ヲ
徴セテシテ其處商業上ノ利率ハ多少民法上
ノ利率ヨリモ高キハ至當カト奉存多ク
御質問ノ件ハ本年二分ト御制定相成度候
以段御答申ニ及ヒ多ク也
明治三十年二月廿三日

青森商業會議所

會頭 渡邊 佐助

法典調查會御中

乙第百四十九辨より御諮問相成候商業
上法定利率規定ノ件當所ニ於テ定審議ノ上
別紙ノ通意見相附シ所回卷申上至間以段御
了取相成度也

明治三十年二月廿六日

京都商業會議所

會頭 濱岡光哲

法典調査會御中

一 商事上ニ於ケル法定利率ハ民事上ニ於ケル
利率ヨリモ貴カラシムルヲ可トス

一 商事上ノ法定利率ハ年七分トスルヲ可トス

理由

普通ニ倭用スル資本ト商事ニ倭用スル資本ト
本ト緩急ヲ異ニスルヲ論リ倭タズ其利子
ニ差異ヲ生ズルヤ從テ明カナリ

商事上ノ法定利率ヲ定メテトナラバ民事
上利率ニ對スル權衡ト實際ノ狀況トヲ參

酌シ宜シキニ適ハサル可ラス

我國ノ狀況ヲ見ルニ一般ノ金利低廉ナラ
バ商業ニ倭用スル資本ノ如キハ平均一割

内
外

下ラカレバニ

歐米ノ法定利率ヲ見ルニ普通ノ利率ヨリ

ハ高キニ居レリ

高業資本ノ如キハ廻轉ノ敏速ヲ要シ苟モ

其流通ニシテ滞セシカ當事者ノ損失ニ

ニテ止マズ其波及スルノ大ナルモアリ

此等ノ諸點ヨリ見ルトキハ前陳ノ利率ハ

低キニ失スルカ如クナリモ我國古来ノ慣

習ト將來ニ於ケル經濟^{進歩}ヲ豫想スルハ

未タ遽カニ法定利率ヲ高カウニシル能ハ

カレモノアリ故ニ彼是計畫^{算定}ニ年七分

ヲ以テ高業上法定利率トナサセテ高ラ

得タルモト信スルナリ

發第一九號

法定利率ニ對スル答申

一月廿六日乙第百四十九號ヲ以テ法定利率
問題ニ對スル當會議所ノ意見答申方所
依規相成至處當會議所意見ニ商業ニ於ル
法定利率八年六分ト為ルヲ以テ適當ト認メ
至間以段答申仕至也

明治三十年三月一日

高知商業會議所

法典調查會御中

内

閣

調第五六辨

本年一月二十六日乙茅百四十九辨ヲ
以テ御照會ニ相成候商業上ニ於ル法
定利率ニ関スル意見別紙之通りニ
候間総會之決議ヲ經テ以段及所
申答候也

明治三十年三月五日

廣島商業會議所會頭桐原恒三郎

法典調査會御中

内閣

答申書

一 高業上ニ於ル法定利率ハ年六分ト為スヲ適當トス

理由

民事上法定利率ハ民法第四百條ニ於テ年五十分ト規定セテシタシドモ高業上ニ於テハ毫分ノ差違ヲ付シ年六十分ト為スヲ要ス蓋シ明治十年九月大政官布告第百二十六號ニ於テ年六十分シテ従来民間ノ區別ナカリシト雖モ世間實際ノ貸資使用上兩ツノ者大ニ其利害ノ程度ヲ同ラセサル者アル可キハ論スルヲ須タサレ第ニシテ遲滯利息ニ於テ最モ其効果ヲ見ルベキ者ナリ

而シテ其差等ノ程度ニ至リテハ毫分ヲ以テ最モ適當ナリト認メラル、ノミナラス高法ハ多ク國際相通ノ性質ヲ有セシムベキ必要アリテ現ニ佛蘭西國獨逸國自耳義國和蘭國等モ亦々皆毫分差等ノ規定ヲ付シ以テ六十分ト為シタシハ將來改正條約實施ノ後ニ於テモ大ニ相互ノ利便ヲ生スル者アル可シト信セラルナリ

發第拾八號

乙第百四十九號ヲ以テ御下関相成高
取列上、法定利率制定ニ關スル件
別紙ニ通リ所回答申上多也

明治三十年三月五日

福井高等會議所

會頭 鷺田土三郎

法典調査會御中

内 閣

高取引上ノ法定利率ハ年二分トスルヲ相當ナリト思料ス

理由

一新民法ノ規定ニ據シハ普通民事上ノ法定利率ハ年五分ナリ而シテ高取引上ノ元資ハ民事上ノ元資ニ比スルハ其運轉破活ニシテ元本ノ為メ利益ヲ得ルコト民事上ノ貸借ノ比アラズ從ツテ商業上ノ法定利率ハ立法ノ政策上民事ノ關スル法定利率トハ之ヲ增加セザル可カラザルナリ

二經濟上ノ制度及ビ沿革ニ徴スルハ必ズシモ其撥ラ一ニセズト雖モ各國立法上ノ沿革ニ拠シハ高法上ノ利率ハ概シテ民事上ノ利率ニ比シテ遜加スルハ殆ト制ス可カラザルノ現象ナリ蓋シ前項ノ理由ニ基ツクコト疑ナキ所ナリ（諮問按萬國利率表参照）

三我國ニ於テハ未タ民事上ノ法定利率ノ規定ナシト雖モ民法上ノ法定利率ハ明治六年利息制限法實施以來年二分ナリ今我國經濟社會ノ狀況ニ徴シ商業界ニ於ケル現在及將來ノ形勢ヲ鑑ミルニ商業上ノ法定利率ハ年二分トスルヲ相當ナリト信ス

進第一〇號

本年一月廿六日乙第百四十九號ヲ以テ商業上ニ於ケル法定利率ノ意見御諮問ニ付本會議所ニ於テ右記ノ通り意見決議致候ニ付此段所
回答仕候也

津商業會議所會頭

明治三十年三月六日

川喜田四郎兵衛

法典調査會御中

一 商業上ノ法定利率ハ民事上ヨリ一分ヲ加へ年六分ト為スヲ可ナリト認ム

内

閣

本年一月廿六日附ヲ以テ御照會相成候高業
上ニ於ケル法定利率調定ニ關スル本會議所
ノ意見別紙ノ通ニ候間相添及御田答也
明治三十年三月九日

仙臺高業會議所

法典調査會御中

法典調査會

一、高業上ニ於テ法定利率ハ民法第四百四條ノ規定ニ從ヒ年五分トスルモ差支ナキカ

元未借金返済ノ期ヲ愆リタルトキハ其延期ニタル日マデノ利息ヲ拂ハサル可カラ
廿八ハ高法上普通ノ原則ナリ而シテ政令別ハ習慣上初ヨリ辨償ノ期ヲ定ムルコトナク後ニ至リ之ヲ定メタルトキ又ハ期ニ定メタルコトナク之ヲ定メタル間ニ生じタル場合ニモ亦施用スルコトヲ得バシ蓋債主ニシテ約束ノ期日又ハ違ニ返金ヲ受ケタルニシハ少ナクモ之ヨリ普通ノ利子ヲ得ベキヲ以テナリ然レニ今其利率ノ民事

法典編會

上ノ利率ト同ウスルノ可否如何ヲ考慮スルニ民事上ノ貸借ハ多クハ單ニ金錢ノ取引ニ過キサシトモ高業上ニ於テハ貸物ノ仕入代金若クハ延賣代金等ニシテ借主ニ於テ因テ以テ利益ヲ得又ハ得ニトスルモノナリカ故ニ世俗ノ所謂恩金ナルモノニ多シ抑モ商人ナラハ素々信用ト徳義トヲ以テ生弁トナスモノナルカ故ニ一方ニ於テ信用ト徳義トヲ以テ之ヲ遇サハ一方モ亦宜ニ以テ信用ト徳義トヲ以テ之ニ對セザルベカラザルハ勿論ナリトス然レニ一方ニ於テ信用ト徳義トヲ以テ之ヲ遇スルニ拘ハラス一方ニ於テ之ヲ捨ツルトキハ是レ

既ニ商人タルノ面目ヲ抛却セル者ナリ故
ニ政ノ如キ場合ニハ其罪ヲ責ムルノ意ヲ
以テ其利率ハ之ヲ民事上ノ利率ヨリ幾分
ノ高位ニ置クヲ相當ナリト信ス

二、若シ差支アリトセル年幾分トスルヲ相當ト
スヤキカ

既ニ前項ニ於ケルカ如ク商業上ニ於ケル
法定利率ハ之ヲ民事上ニ於ケル利率ヨリ
幾分高位ニ置クベシトスルモ民事上ニ於
テ契約上假令肌カニ利率ヲ定メザルモ利
息ヲ支拂フヘキ旨ヲ約シタル場合ニテ又
テ其利率ヲ年五分トナセル程ナシハ元來
尋常貸借ト其性質ヲ異ニスル商事利率ハ
年二分トナスヲ相當ナリト信ス

三、法例ニ依ル

高事ニ関スル法定利率ノ義ニ片答申

拝啓本年一月廿二日付乙第百四十九號ヲ以テ
高事ニ關スル法定利率ナラ民事上ノ利率ト因一
ニ定ムルモ實際ニ是亦無キヤ否即関合ニ趣
敬承則テ左ニ鄙見開陳仕ヌ

高事上ノ利率ハ民事上ノ利率ニ比シ凡ニ幾分
ノ高位ニアルハ古來慣習ノ自ラ然レ所ニシテ
海外諸國ニ於テモ亦以趣向ヲ同フニ多少ノ懸
隔ヲ存スルモノ歟ナカラズ元來高事上ニ已
テ得テハ關係ヨリニテ自家ノ手本ニアラハ
運轉極テ無ク五ニ收金ノ素賢タリベキ資本
ノ一部ヲ割キテ他人ノ為メニ一時ノ融通
ニ供スルハ民事上ノ貸借ノ關係ト大ニ其

法
義
論
考

趣ヲ異ラセル事情者之矣用從フテ其利
率ノ比較的高位ニアルハ適當ノ事ト被存
在而シテ其割合ハ各高事ノ情態ヲ異ニ
スルト共ニ古來ノ慣習區々ニ様ナラズ中
ニ八月一ト唱ヘ一ヶ月一分即チ老キ年一割
或分ノ高率ナハ慣習モ有之矣得共現今
牢固之金融市場裡ニ倍ニ貸西流通疏達ノ
時期ニ會ヒテ國家百年ノ為メニ一新法規
ヲ制定セラレハ、ニハ固ヨリ斯ノ如キ高率ナラ
標準トスベキニ無ク之矣間以際所制定相成
ベキ高事ニ關スル法定率ハ一ヶ年ニ二分ト
シ民事利率ノ五分ニ對照シテ適度ヲ保
タシムルラ相當ト相認メテ斯ノ如ク相成ヌ

ハ、商事上實際ニ差支無之ノミヤウク
海外諸國ノ法定利率ニ對シ比準ノ宜キ
ヲ得テ好都合ト存ス

古當會議所ノ成議ニ基キ答申仕美也

明治三十年三月十六日

堺商業會議所會頭藤本莊太郎

法典調査會總裁祐齋方正義殿

法定利率ノ儀ニ付本年一月二十六日ヲ以テ所
諮問相成候處本會議所ハ別紙之通決議仕候ニ
付此段御答申仕候也

博多高業會議所

明治三十年三月六日 會頭 小河久四郎

法典調查會御中

法定利率之義ニ付答申

決議

高法ニ於ケル法定利率ハ民法ノ年五朱ヨリ
高クニ年六分トスルヲ相當トス

理由

高事ノ金融ハ民事ヨリモ頻繁ニシテ且ツ多利
ナルハ普通ノ現象ナルヲ以テ民法上ノ利率ヨ
リモ高ナルノ必要アリ然レシラニテ既成商法ノ
如ク七朱トスルハ聊カ高キニ過ク何トナシ人
目下我國ノ金融社會ハ一時産業ノ勃興ニ伴フ
テ高利ナルハ事實ナリト虽將未實業ノ進歩社
會ノ開明信用ノ鞏固國富ノ増加幣制ノ改革ト
共ニ金利次第ニ下給スルハ年ウヘカラケル數

法典編覽會

理十九ヲ以テ高法ハ之ヲ六朱トスルヲ至當ト
ナスベシ且ツ世界各國ノ法定利率ヲ見ルニ概
子此標準ヲ採シリ我國モ亦爾今世界貿易ノ益
々發達スルニ從ツテ世界金融ノ率ヲ鑑ムベシ
是高法上ノ利率ハ六朱ト決議ニタリ所以ナリ

本年一月廿二日附ヲ以テ御諮問初成候商業上
ニ於ケル法采利率ニ付キ本會議所ノ意見ハ別
紙ノ通ニ所産候周知殿及御答申候也

明治三十年三月十五日

赤間商業會議所會頭松尾重三

法曲詔查會總裁伯耆松方正義殿

商事上ニ於ケル法定利率ニ関スル

意見書申書

一 商業上ニ於ケル法定利率ハ年六分トスルヲ
相當トス

(理由)

商業上ニ使用セラレハ、資金ハ民事上ニ使
用セラレ、モノニ比スレハ、其運轉頻繁ニ
シテ且ツ之ヨリ生スル利益ノ多キ等兩者
使用ノ關係ニ於テ大ニ其趣ヲ異ニスルヲ
以テ其利率ニ於テモ輕重ナカレ可ラズ旧
商法ニ於テ一般ノ法定利率ハ六分ナリモ
商業上ニ於テハ時ニ之ヲ七分トセリ今ヤ
經濟事情ノ發達ニ伴ヒ内外金融ノ趨勢ヲ
酌量シ新民法ニ於テハ旧法ニ比シ一分ヲ
輕減シ民事上ノ利率ヲ五分ト規定セルハ
蓋シ現今ノ經濟事情ニ照シ適當ナラハ依
スルナリ依テ商業上ニ於テハ民事利率也
分ニ比シ一分ヲ増シテ六分トスルヲ相當
トス

高登第一一號

本年一月二十六日付乙第百四十五號ヲ以テ御
垂問相成テ高事止ノ利率答申ノ儀甚ク遅延致
シ候處今般當會議所總會ニ付テ討議ノ末尤記
ノ通り本會ノ意見答申仕修也

明治三十年三月十七日

京都官高業會議所

會頭田中勝次郎

法典調査會御中

法典調査會

記

一高事上ノ利率ハ年六方ト規定セラル、ソ至
當トス

理由

高事上ノ金銭融通ハ民事上ト大ニ異ナリ
常ニ機敏ヲ要スルカ故ナリ

癸卯二十九號

高業上ニ於ケル法定利率ニ関スル意

見込申書

本年一月二十六日付ヲ以テ御諮詢相成テ高業上ニ於ケル法定利率ニ付キ本所ノ意見ハ別紙ノ通ニ御座矣間以殿及市答申書也

明治三十年三月廿二日

神戸高業會議所

會頭 山本龜太郎

法典調査會總裁伯爵松方正義殿

一商業上ニ於ケル法定利率ハ民法上ノ法定利率ト區別スルヲ至當トス

一商業上ニ於ケル法定利率ハ年七分トスルヲ適當トス

理由

凡ハ商取引ニ用クル資本ハ其運轉ノ迅速ナルト隨テ之レヨリ生スル利益ノ多キ等々ノ事ニテ其法定利率モ民事上ノ法定利率ニ比シ等差ヲ附スルヲ當然ノ事ナリトス

復今我國一般ノ利息ハ歐米諸國ニ比シ非常ノ高率ヲ示セリ是レ種々ノ原因アル可シト雖ハ經濟社會ノ進歩ニ伴ヒ利率ノ低廉ニ赴クハ歴

史上一般ノ現象ナリ故ニ我國モ亦此趨勢ヲ免スルコト早晩利率低廉トナルハ明カナリ

殊ニ近時我國商業上ノ状態ヨリ觀察スレバ其利率ハ既往ト將來トヲ熟察シ以テ之ヲ律セザル

ベカラス今日ハ經濟事情変動ノ時機ニ際スルヲ以テ早急ニ準備ヲ今日ニ取ラズ比較的ニ之ヲ低廉ニ定ムルヲ可ナリトス

然レハ利率ノ高キニ過クハ商業上資本ノ融通ヲ阻害ナラシメザんト企テ其低キニ過クハ資本運轉ノ圓滑ヲ缺クノ虞アリ故ニ能ク實際ノ状態ニ鑑ミ其適度ヲ俾タザンベカラ

前數項ノ理由ニ依リ民事上ノ法定利率五分ニ
對シ商事上ノ法定利率ヲ年七分トスルヲ適當
トス

法典綱目會

高業上法定利率ノ件ニ付御諮詢、趣敬
兼本會議所ニ於テハ審議ノ上別紙、通
決議致候間以段及卷申候也

金澤高業會議所

明治三十年三月廿二日 會頭 龜田仔右三門

法典調查會御中

商業上ノ法定利率ハ年七分ヲ以テ相當トス

抑モ賣買取引ノ迅速ヲ貴ビ金銀授受ノ正確
ヲ保ツハ商業上ノ一要素ナリトス故ニ遲延
利息若クハ立替金利子等ノ如キ双方間ニ於
テ豫テ合意アラサル場合ノ利息則チ法定上
ノ利率ハ概テ過急ノ意味ヲ有スルモノナル
ヲ以テ商業上ニ於テハ普通民事上ノ利子ニ
比シ多少貴キモノトスルヲ相當ナリトス政
洲各國亦大抵民法上ノ利率ヨリ重クスルヲ
例トシ我國ノ民法ニ於テハ其法定利率ヲ五
分ト定メ利息制限法ハ之ヲ六分トセリ故ニ
商業上ノ法定利率ハ之ヲ各國ノ例ニ照スモ
之ヲ我國ノ慣例ニ徴スルモノ年七分トスルヲ
適當ト為ス

内

閣

一月二十六日付乙第百四十九號ヲ以テ所諮問
相成候商業上ニ於ケル法定利率之義別紙ノ
通調査ヲ遂候ハ付次段及所答申候也

明治三十年四月二日

四日市商業會議所會頭井島茂作

法曲調査會印中

内閣

法定利率之說ニ答申

高事上ノ法定利率ハ年五分トナスラ適當トス
理由 高事取引ニ供用ノ資金ハ其運轉頻繁
ナルガ上ニ危険ノ度愈モ亦隨テ強キモノ
ナレバ之ニ伴フ利息ハ民事上ニ於ケル利
息ヨリ貴カラサルヲ得ス試ニ現今金融市
場年八九分ノ利息ヲ以テ民事上ノ法定
利率年五分ニ比スルトキハ其差五、其之
中ヲ見んべシ然レドモ高事利率ヲ法律ニ
規定スルニ當リテハ固ヨリ以一時ノ市場
利息ヲ標準トナスベキニアラズ故ニ亦所
ハ既往現在ノ經濟事情ニ徴シテ將來ニ察
シ又内外ノ事情ニ考ヘ茲ニ我民事上法定
利率ノ年五分ナルニ對シ高事上ノ法定利
率ヲ年七分ト決定セリ

會進第六五辨

乙茅百四十九辨ヲ以テ御諮問相成候商
事上ニ於ケル法定利率ノ件ヲ承仕候左
記ノ通及卷申條也

明治三十年四月二日

鹿兒島商業會議所

法典調査會所中

高事上ニ於ケル法定利率ハ二分ヲ相當ト認ム
資財ナルモノハ之ヲ使用スルノ緩急如何ニ
ヨリテ大ニ輕重ノ差アリ即チ民事上使用ス
ル資金ト高事上ニ使用スル資金トハ損得ノ

法典調査會

因ルトコ口自ラ軒輕アルコト論ニ倭々サレ
ナリ高業資金ニシテ一朝滯滞授塞セカ其
損失ノ波及スルトコトハ豈普通資金ノ比ノミ
ナラヤ然ラバ即チ其利率ニ高低ヲ生ズル
ハ自然ノ結果ト云フ可シ改米各邦高低アル
ヲ見ル本邦實際ノ情況ニ徴スルハ一割内外
不當ノ矯チキカ如此然シトモ之ヲ將來ニ鑑
ミ外國ノ情況ヲ觀察ニ未レハ低廉ナラサル
本邦ノ利率ハ漸次低落スベキノ觀アルヲ以
テ直ニ之ヲ法定利率トハナシ難シ故ニ其間
ヲ斟酌シ二分トナスハ資金其物ノ性質ニ對
シ相當ノ利率ナラニコトヲ認ム

一月廿六日附シ以テ諮問相成至商業上法定利率ノ件ニ付審議任ヌ處其意見別紙ノ通ニ所屬英條及段及所答申ヌ也

富山高業會議所

明治三十年四月十四日 會頭 關野善次郎

法典調査會所中

(一) 高業上ノ法定利率ハ民事上ノ利率ト異ナル
之ハルヲ可ト信ス

(理由) 普通ニ便用スルモノト高業上ニ便
用スルモノトハ資本ノ運用上ニ於テ緩急
ノ差ナキ能ハズ徑ラ之カ法定利率ニ於テ
モ亦差異ヲ附スルハ至當ナルコトナリト
信ス

(二) 年七朱ヲ可トス

(理由) 今高業上ノ法定利率ヲ年七朱トス
ルハ之ヲ民事上ノ法定利率ニ比シ重キニ
返ルルノ感アリト雖現今我國市場ニ於ケ
ル利息ハ一割内外ニシテ(當地ノ如キハ年

法典調査會

均年一割ニ歩ナリ) 之ヲ法定利率ニ假シ年
七朱トシテ比較スルモノ尚三朱内外ノ差ア
リトス然レドモ民事上ノ利率トノ稱衡ヲ
誓ヘ及將來ニ於ル經濟上ノ發達等ヲ豫期
シ彼長比較校量之ニハ前記ノ如ク年七朱
ヲ相當ナリト信ス

去八月二十日附ヲ以テ所諾問相成候事
法定利率ノ件當所ニ於テ審議、上別紙ニ通味
是致至間、抄取申仕修也

岡山商業會議所

明治三十年四月十日 會頭 香川 真一

法典調査會ニ送附書 松方正義殿

法典調査會

一 商業上ニ於ケル法定利率ハ年二分トスルヲ
以テ相當ナリトス

理由

商事ニ於ケル資本ハ其民事ニ於ケルモノモ
一層重大ナク故用ヲ有シ之ヲ運轉ノ度ニ亦
可成迅速ヲ要スルノ習例アリ且ツ民事上ノ
貸借ハ自ラ恩惠的ノ性質ヲ有スルモ商事ノ
貸借ニ於テハ收利的性質ヲ含蓄スル等ニ為
ノ間同一視スベカラザルノ事情多ク從テ利
息ヲ生スベキ債權ニ関シ何等ノ契約ヲナサ
ザリニ場合ニ於テモ亦比較的高歩ノ利息ヲ
支拂ハカハヘカラザルハ理ノ當リ然レハ

民法ニ依ル

キ處ナリ然レハ其利率ヲシテ民事利率ニ比
シ數等ノ高位ニ在ラシムルモ亦適當ナラハ
故ニ今新民法ノ法定利率ヲ標準トシ之ニ一
分ヲ附加シテ二分トナスハ大ニ適當ナル處
置ニシテ之ヲ現今ノ金利ニ比較スルハ民事
ニ於テ聊カ低廉ニ失スルカ如シト雖モ將來
經濟界ノ發達ハ必ズヤ詭般ノ利息ヲ低廉ナ
ラシムヤキノ事情等ヲ推測シ来ルトキハ必
ズ之ヲ規定スルニコト固ヨリ必要ナル方策ナ
リト信ズ

本年一月二十六日附_レ以_テ御諮問相成_ニ至_レ法定
利率_有本所之意見_ハ別紙之通_ニ有_レ任_員間_下延
引_レ此段_御田卷_申上_候也
明治三十年五月五日

大津商業會議所

會頭 田田三之助

法典調查會御中

一 商事上ノ法定利率ハ年六分トスルヲ可トス
理由

凡ソ民事上ニ係用スル資本ト商事上ニ係用
スル資本トハ大ニ其趣ヲ異ニスル而ヒテ
又商事上ニ係用スル資本ハ其運轉頻繁ニシ
テ之レヨリ生スル利益ノ大ナルハ論ヲ俟タ
ズシテ明ナリ己ニ此兩者間ニ於テ其緩急ヲ
異ニスレバ亦之ニ對スル法定利率モ此兩者
間ニ於テ適當ノ差違ヲ設ケザルヲ得ザルハ
數ノ免レサハ所ナリ故ニ商事上ノ法定利率
ヲ定メシトセハ宜シク先ツ民事上ノ利率ニ對
スル權衡ト實際ノ狀況ヲ相參酌シ且其宜シ
キニ從ハサハ可カラズ從テ我同金融事務ヲ
見ルニ商業ニ係用スル資本ノ如キハ稍高貴
ニ失スルノ觀アリ蓋シ商業資本ノ如キハ只
廻轉ノ敏活タラシメシトコトヲ要ス苟モ流通
上滯滞ヲ生サレカキ路者ノ授受少ナカラズ
其鈔說スル所ニ依從テ大ナルテ改メ是等
ノ點ヨリ考査スレバ商事上ノ利率ハ乃チ年
六分ヲ以テ尤モ適當ナリト

天功五五卷

本年一月廿六日有御諮問：相成候商業上ニ於
テハ法廷利率之件本會議所ノ意見別紙ノ通決
議仕候此段及御答申候也

明治三十年五月廿一日

尾道商業會議所

會頭 橋本吉兵衛

法典調査會所中

高業上ノ法定利率ハ年七分トナスヲ以テ適當トス

理由

凡ソ高取引ニ使用セラルル資金ハ彼ノ民事上ノ取引ニ於テ人モノニ比スレバ信用頻繁ニシテ之ヨリ生ズル利益ノ多分ナルモ又之レニ伴フ危険ノ度愈強キ等大ニ其趣ヲ異ニスルモノアリ故ニ之ニ對スル法定利率ノ如キモ隨テ是等ノ段ヶザル可カラス即高業上ノ法定利率ハ民事上ノ法定利率ニ二分ヲ増シ年七分トナスヲ以テ適當ナリトス

法典調査會

ニ利息ヲ支拂フベキ旨ヲ以テスルガ如キ債然タル契約ヲナスモノニマラズ假令是ノ如キ場合ヲリトスルモノ一瞬稀有ノ事タルニ過ギズ此稀有ノ事ニ對シ利率ヲ低廉トスルハ債務者ヲ以テ猶更ニ其辨償ヲ緩慢トセシメ人終ニ資本運轉ノ敏捷ヲ害スルノ弊ヲ生ズルニ至ラシ故ニ利率ヲ昂ウスルハ債務者ヲ以テ其辨償ヲ速ニセシムルト並ニ債權者ヲ以テ他ノ高業資本ト同一利益ヲ得セシムル所ナリ例セハ近時株式會社ノ株金押込ノ迄滯利息又一般主語金系ノハ遲延利息等市上一般ノ利息ニ比シ今且ニ其利率ヲ昂フスルガ如キ罰金的制裁ヲ付スルモノ是

レ現今ノ趨勢ナリ故ニ商業上ニ益利率ハ之
ラ年七分トナシモ是ヨリ本邦今日及將來經濟
社会ノ大勢ニ察シテ敢テ過昂ニアラザルナ
リト信ズ

本年乙第百四十九號ヲ以テ御諮問相成假高業
上ニ於ケル法定利率ノ件本會議所ノ意見ハ別
紙ノ通有之假条坎段及答申候也

明治三十年六月四日

岐阜産業會議所會頭渡邊甚吉

法典調查會御中

法典調查會

答申書

一 商業上ニ於ケル法定利率ハ民法第四百四條ノ規定利率ト區別スルヲ至當トス

二 商業上ニ於ケル法定利率ハ毎七分トスルヲ相当トス

理由

現時我國商業上ノ利率ハ歐米各國ニ比シ高率ナルモ經濟社會進歩ノ時機ナルヲ以テ今日ニ於テ他國ニ定ムルハ不可ナリ百般ノ事業振興ニ經濟社會發達スルト共ニ金利他國スベシトハ一般ニ唱道スル所ニシテ目下我國經濟社會ノ狀態ヨリ觀察スレハ利率ハ早晚他國ニ赴クハ明カナリ然ルニ以テ法典ニ

法典調査會

現定スル利率ヲ他國ナラシメシカ忽チ商業上資本運轉ノ圓滑ヲ致クノ慮アリ而之レニ及シ利率高キニ失セシカ商業上資本融通ヲ圓滑ヲ妨クルノ患アリ故ニ既往將來ヲ查察シ實際ノ現狀ニ照シ適度ノ利率ヲ定ムルヲ可トス而テ商業取引ニ使用スル資本ハ運轉頻繁ナルト同時ニ具生スル所ノ利益モ隨テ多キヲ以テ之レニ對スル利率モ亦等差ヲ付セサルヘカラス本會議所ニ於テ適度ト思量スル利率ハ民法上ノ法定利率毎五分ニ對シ商業上ノ法定利率ハ毎七分トスルヲ適當ナリトス

泰亨云云

本年一月二十三日附ヲ以テ御座會相成矣高事
上ニ於ケル法定利率ノ件其後遂ニ逐調査便處
商事上ノ法定利率ハ民事上ノ利率ヨリ高キヲ
當然ナリト思考スルニ付本會議所ハ民事上ノ
利率ヲ年五分ト定ムラシ、以上ハ商事上ノ利
率ハ年六分ト定ムルヲ至當ト認メ候歟殿本會
議所ノ決議ニ依リ及御座會便也

明治三十年六月十二日

東京商會議所會頭澁澤榮一

法典調査會

席中

法典調査會

本年一月二十六日附テ以テ御諮問相成候法定
利率ノ儀ニ付審議相遂候處本會議所ノ意見尤
ノ通ニ有之候條此段及即答申候也

知田商業會議所

明治三十年七月廿九日 會頭 天誓伊左衛門

内閣法典調査會御中

法典調査會

意見

商事上ニ安ムル法定利率人民事上ノ利率ニ
比シテ之ヲ賣カラシムルガハ一カラス故ニ民法
第百四條ニ於テ年五分ト規定シタルニ對
シ商事上年二分ノ規定ヲ設ケ以テ一分ノ差
違ヤラシムルニコト最モ妥當ナルヲ認ム